# 厚生文教常任委員会報告事項資料

資料 番号	資 料 名	所 管 課
1	橘地域認定こども園整備事業の進捗状況 について	保育課
2	新病院建設事業 (スライド協議の請求) について	病院再整備課
3	ステップアップ調査の実施状況について	教育指導課

## 橘地域認定こども園整備事業の進捗状況について

#### 1 事業概要

橘地域に保育施設がない状況や、同地域の公立幼稚園の園児減少を踏まえ、公立 幼稚園2園を統合し、現在の下中幼稚園の敷地に、幼保連携型認定こども園を整備 する。

令和6年度(2024年度)は、基本設計、実施設計及び下中幼稚園の園舎等の解体 工事を行い、年度末までに認定こども園の新築工事に着手することを目指している。

#### 2 施設整備の基本方針と設計の基本的な考え方

令和4年(2022年)12月に策定した「(仮称)橘地域認定こども園整備基本計画」において施設整備の基本方針を定めており、これを踏まえて設計を行っている。

#### (1) 基本方針

子どもたちの主体性や創造性を伸ばし育むことができるとともに、使いやすく 安心・安全な施設とすることを基本とし、公共建築物として脱炭素化社会の実現 に資することや子どもたちにとって温かみやぬくもりが感じられる施設整備を目 指す。

#### (2) 設計の考え方 (別紙参考資料参照)

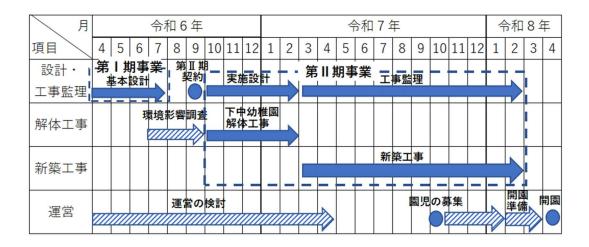
- ① テラス、昇降遊具や屋外階段などが立体的な回遊性を生み出すことで、園児が利用する諸室と屋外(園庭)との連続性が高い居場所をつくる。
- ② 諸室や園庭の配置により、園児の年齢に応じて緩やかに活動範囲を分離することにより安全性を確保する。
- ③ 環境負荷低減に配慮し、高断熱外壁やLOW-E複層ガラスの採用、太陽光パネルの設置などによりZEB Oriented化相当以上の施設とする。
- ④ 保育室や遊戯室等の内装を木質化することで、園児が普段から小田原産木材 に触れることができ、視覚的にも温かみのある園舎とする。

#### 3 運営の検討状況

- ・ 幼稚園、保育所及び児童発達支援等の運営に携わる職員が、それぞれの分野で 培ってきたノウハウを集め、認定こども園の運営に反映すべき事項を検討して いる。
- ・ 令和6年度は、インクルーシブ教育・保育、地域子育て支援事業や各種行事の 在り方及び異年齢児教育・保育等のテーマを検討しており、年度中に園運営に 必要な各種計画や重要事項説明書等の取りまとめを行う。

#### 4 今後のスケジュール

- 7月末に第Ⅰ期事業である基本設計が完了
- ・ 8月中に第Ⅱ期事業である実施設計、解体工事、工事監理及び新築工事に係る 仮契約を締結し、9月定例会で議案承認後に本契約の締結を予定
- ・ 下中幼稚園解体工事は10月に着手し、令和7年(2025年)2月末に完了を予定
- ・ 新築工事は令和7年3月に着手し、令和8年(2026年)2月末までに引き渡し を予定
- 令和8年4月の入園募集開始時期は、令和7年10月頃を予定



(人)

## 基本設計概要

## 【施設概要】

・事業箇所:小田原市小船174番地1

・敷地面積: 2,148.86 m²
・建築面積: 747.42 m²
・延べ面積: 997.70 m²

・構造/階数:木造/地上2階建て

• 施 設 定 員:92 人

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	計
保育部	5	10	10	12	13	13	63
幼稚部				9	10	10	29
計	5	10	10	21	23	23	92

・諸室関係:保育室、遊戯室、一時預かり保育室、職員室、相談室等

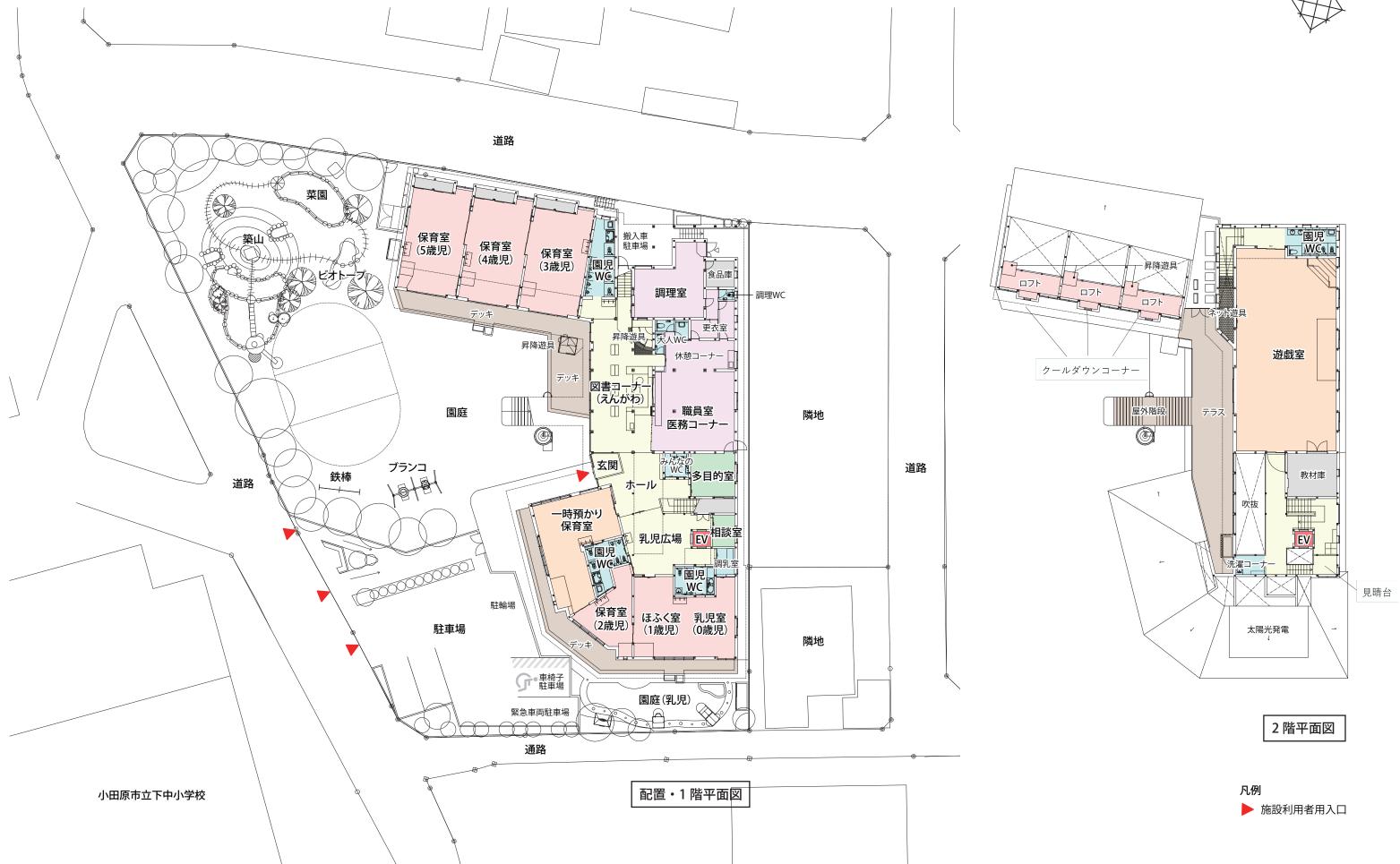
・駐車場台数:敷地内4台(内車いす用1台)(送迎用駐車場は敷地外に確保)

駐輪場台数:20台

・環境配慮:太陽光発電、省エネ機器の採用、外壁・屋根・開口部の高断熱化等









南側立面図



西側立面図

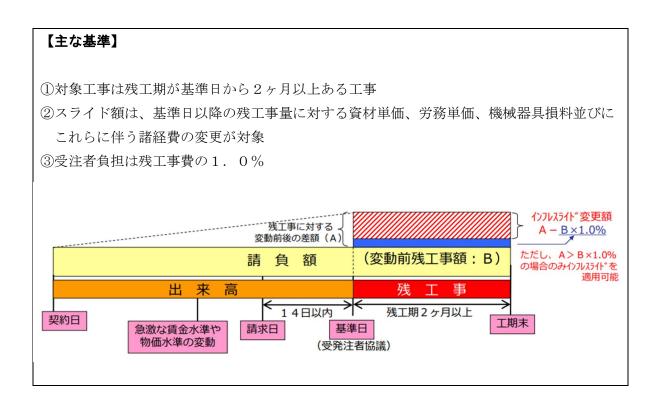
## 新病院建設事業(スライド協議の請求)について

#### 1 経緯

令和5年12月28日 工事請負契約の締結 約252億円 工事着手 令和6年7月19日 工事請負契約(工事の追加に係る変更)の締結 約268.8億円 令和6年7月22日 インフレスライド協議の請求

## 2 インフレスライド概要

インフレスライドとは、小田原市工事請負契約約款第26条6項に基づき、「予期することのできない特別の事情により、工期内に日本国内において急激なインフレーション又はデフレーションを生じ、請負代金額が著しく不適当となったとき」に、請負代金額の変更を請求できる措置



## 3 インフレスライド協議の請求内容

請求日 令和6年7月22日

基準日 令和6年7月22日 出来高確認

請求概算額 5.4億円(税込)※

※建設物価調査会が公表する令和6年1月と同年6月の「建設物価 建築費指 数」に基づき算定(約3.2ポイント上昇)

#### 4 今後の流れ

~令和6年9月 スライド額(案)算定※

※契約日時点における資材単価等と基準日における資材単価等を精

査して算定

令和6年10月 スライド額協議・スライド額確定

令和6年12月 補正予算上程・変更契約締結

## (参考) 工事スケジュールと進捗状況

	令和6年(2024年)		令和7年(2025年)		令和8年(2026年)	
着	工(0%) 7月	25日時点	(7. 9%)	竣	工(100%)	
杭・基礎・免震工事						
地上躯体・鉄骨工事						
外装工事						
内装工事·設備工事						
開院準備						





## ステップアップ調査の実施状況について

#### 1 実施時期

令和6年5月23日(木)~6月6日(木)

\*この期間内で、学校ごとに調査日を設定した。

タイプ①…一斉実施(16校)

タイプ②…学年ごとに時程をずらして実施(7校)

タイプ③…学年ごとに日程をずらして実施(13校)

#### 2 実施学年

小学4年生~中学1年生(モデル実施校は中学2年生)

#### 3 調査内容等

- ・調査内容…国語、算数・数学、児童生徒質問紙・学校質問紙 \*児童生徒質問紙では「非認知能力」「学習方法の習得」「主体的・ 対話的で深い学びの実施」「学年・学級経営」について把握
- ・調査時間…1 教科小学校 40 分・中学校 45 分 (質問紙は 20~30 分)
- 調査方法…CBT 方式 (コンピューターベースドテスティング)

#### 4 調査実施後の学校からの声

- (1) 調査のための準備
  - ・IT リーダーが良くやってくれて頼りになった。
  - マニュアルが大量だったが、各学年分印刷をした。担任が必要なところが絞ってあるとよい。
  - ・個人番号票を印刷するのが大変だった。
  - ・問題配信までは教育委員会でやっていただけるとありがたい。
  - ・ MEXCBT 体験を行った時期に、ネットにつながりにくい状況になっていて大変だった。



#### (2) 調査時期

- ・日程的な厳しさはある。行事との兼ね合い等。次年度は2年目になるので、 少しは緩和されるのではないかと考えている。
- ・年度初めのこの時期に、全国学力・学習状況調査とステップアップ調査の二つに取り組まなければならず、授業が進まない。特に6年生は修学旅行や児童会活動の提案等の取組があり、時間的に余裕がない。

#### (3) 環境整備

・担任が調査中にどんなトラブルが起こりうるか、それ にどのように対応したらよいか把握できていないこと が不安だった。



- ・スムーズにネットにつながらない児童が1割~2割おり、全員が始まるまで 15分ほどかかった。
- ・学習用端末の不具合により、代替機を貸し出すなどの対応をした。
- ・ 実施日当日に ICT 支援員の配置をお願いしたい。

#### (4) 児童生徒の様子

- デジタルドリルをやっているので答え方にはそんなに困らなかった。
- ・体験で練習ができていたので、当日は困らなかった。
- ・中学校では、定期試験同様、整然と取り組んでいた。
- ・ 6年生は今までの積み重ねがあるので、操作については問題がなかった。
- ・ 4年生はローマ字表を渡して臨ませたが、入力に苦労していた。
- ・ 4年生でローマ字入力ができない児童がいて、手書き入力に時間がかかっていた。 日頃から使い慣れておく必要があると感じた。
- ・スクロールしながら行ったり来たりが大変で、国語では終わった後疲れ切っていた。
- ・問題数が多く、最後まで終わらない児童がいた。

#### (5) その他

- ・今後大学入試や資格試験などでデジタル化が進むと思われ、小学生のうちから体験できるのはよい。
- ・テスト用紙だとやる気にならない児童も Chromebook だと興味を持ってやる 気になっていた。
- ・ 学校質問紙は過去に遡って調べなければならないことが多い。 旧担任や教務 が異動しているケースもある。 調べるだけでも負担が大きい。



#### 5 調査の活用について

• 活用研修

時期…9月20日(金)~10月31日(木)の期間で学校ごとに設定する。

目的…教員が児童生徒の学力の伸びの具合を把握し、それに応じた授業改善・工夫及び個に応じたきめ細かな指導・支援を検討し、今後の教育活動に生かす力を身に付ける。

方法…各校に指導主事が赴き、研修を進行する。委託業者が作成した分析シートを用いて行う。

時間…75 分間

#### 活用研修内容(予定)

- ①ステップアップ調査の特長の確認
- ②学年分析シートの見方の理解
- ③学年ごとのグループワーク
  - ・学年分析シートの学力とそれを支える要素の状況の共通理解
  - ・把握した状況から考えられる指導の効果及び今後の指導の改善点について協議・記録
  - ・協議内容の共有
- ④個別分析支援シートの見方についての理解
- ⑤学年ごとのグループワーク
  - ・個別支援の検討



・各校における授業改善・個別の学習指導 活用研修を踏まえ、日々の授業改善や学習指導に生かす。

#### 6 令和7年度以降の実施について(予定)

- ・小学4年生~中学2年生での調査実施を計画している。
- ・活用研修については継続して実施し授業改善に生かす。

## ステップアップ調査モデル実施校における成果報告について

#### 1 モデル実施の経緯

一人ひとりの学力やよさを伸ばすためには、学力の「伸び」を経年で測定し、そのデータをエビデンスとして、授業改善及び個に応じたきめ細かい指導に生かすことが有効であり、ステップアップ調査は、学力の「伸び」を測定できる調査である。本調査を本市で全校展開するにあたっての課題を明らかにするため、令和3年度より2中学校区(中学校2校・小学校4校)で3年間モデル実施をした。

#### 2 モデル実施の方法と特長

#### (1)調査方法

対 象:モデル校(6校)の小学4年生~中学3年生

酒匂中学校区:酒匂中、酒匂小、富士見小

泉中学校区:泉中、富水小、東富水小

調査内容:国語、算数·数学、質問紙

実施時期:4月~5月(指定期間内から学校事情に合わせ学校が実施日を決定)

#### (2) 調査の特長

・平均と比べない、一人ひとりの「伸び」を経年で把握する。

・学力の伸びに大きく関係する「非認知能力」「学習方法の習得」「主体的・対話 的で深い学びの実施」「学級学年経営」について質問紙で把握する。

#### 3 調査結果の概要

- ・全ての学年・教科で、学年が上がるごとに着実な学力の伸びが見られることが 把握できた。
- ・国語については約7割の児童生徒の学力が伸びている。
- 算数・数学については約6~7割の児童生徒の学力が伸びている。
- ・学級風土 (クラスの雰囲気・先生や友達との人間関係) について約9割の児童 生徒が肯定的な回答をしている。

#### 4 教職員の調査実施に対する感想や要望

感想には、調査結果を踏まえて指導する際に**意識するようになった点**や、児童生徒の状況に対する**効果的な取組**などが記載された。一方で、要望には、教職員や児童生徒の負担軽減をはじめとする、調査実施に係る**業務の効率化や精選**に関する内容が多く寄せられた。

#### (1) 調査実施に対する感想例

- ・教職員が非認知能力に着目するようになっ た。一人ひとりの見とりも、そうした非認知能力 (粘り強さ・自制心など)に着目することが多く なった。
- ・調査において、学年や一人ひとりの伸びや傾 向がはっきりするため、児童への見とりを大切 にし、その子にあった形で学習できるように教 職員で心がけることができた。
- ・教職員が結果から分析したことをもとに手立 てをうつことができたため、その適切な支援や ことばかけによって児童のやる気を高めること ができている。特に国語では、児童のやる気の 創出と共に前年度からの大きな伸びを見るこ とができた。
- ・勉強が苦手な子が、伸びた自分に喜び、学習 に関するアドバイスを読む様子が見られた。
- ・中学校区全体の状況について理解を深める 資料としてとても良い調査であった。本中学 校区では、どの学年も共通して中間層の伸び が低くなる傾向にある。そうした傾向を共有し 協議することで、小中の連携が深まった。また、 小学校から中学校への引き継ぐときの資料と しても有効であったと実感している。

#### (2) 調査実施に対する改善・要望例

- ・ステップアップ調査の準備・事後処理をスムー ズにできるようにしたい。調査の個人番号と結 果の紐付けが、非常に大変(特に中学 | 年) である。名前と個人番号が紐付けした状態で、 エクセルファイルと個人番号シールを配付して ほしい。
- ・分析に時間と手間がかかるので、そのための 時間の設定が必要である。夏季休業中に結果 が分かれば、それに合わせて研修や作業を行 う日を夏季休業中に設定することができる。
- ・データの量が膨大でわかりづらく分析に大変 時間がかかる。教育委員会が資料を作成した ことで対応できたが、学校単独での対応となる とかなり厳しい。
- ・全国学力・学習状況調査もある中で生徒、職 員の負担増が大きい。生徒にとってはステップ アップ調査の方がメリットは大きいので、何ら かの方策を取ってほしい。

#### 5 保護者アンケート結果概要

- ・学力の伸びの状況について
  - ⇒「わかった」「だいたいわかった」の肯定的回答=88.4%
- ・個人結果票に記載されている学習のアドバイスについて
  - ⇒「わかった」「だいたいわかった」の肯定的回答=85.5%
- ・ 調査結果を受けて、家庭で子どもと話をした内容について
- ⇒「昨年度からの学力の伸びについて」「調査結果に書かれている学習に関する アドバイスについて」「今後の各教科 **の勉強方法について」**などの回答が 多数
- ・その他感想等の自由記述では 回答の62%が肯定的意見(右参照)

<調査に対する肯定的な意見の例>

- ・ステップアップ調査をすることにより、昨年からの学 力の伸びを本人が確認でき、次への頑張り(意欲) につながっているようです。
- ・自分が頑張った分、成長が目に見えて理解できた ので日々の勉強に生かせるようになってきました。

保護者アンケートの結果から、個人結果票の返却を通して、学力の伸びが分かる 良さを感じている保護者が多くいることが分かる。同時に、児童生徒のやる気の創 出や、学習に係る親子のコミュニケーションの機会の提供にもつながっている。

#### 6 モデル実施の成果

成果として4点にまとめた。モデル校ではPDCAサイクルを回し、授業や指導の改善や工夫を行うことで、一人ひとりの学力の伸びを促すことができた。調査結果から指導改善・工夫をした具体例を別表にまとめた。

#### (1) 教職員の意識の変容

学習内容の習得だけではなく、「非認知能力」をはじめとする様々な要素を 大切にして児童生徒一人ひとりを伸ばす意識が、モデル校の教職員に広がって きたことは大きな成果の1つである。(ケース①)

## (2) 児童生徒に合った指導や言葉かけ

児童生徒の結果の詳細に応じた言葉かけをしたり、個別に具体的な支援や指導方法を検討したりし、PDCAを回す例が報告されている。(ケース②・③)

#### (3) 児童生徒の意欲の創出

学力が高い・低いに関わらず「伸び」が見られた児童生徒にとっては手ごた えを得ることができる。その手ごたえや「伸び」の様子から意欲を引き出す工 夫をし、学習指導に生かすことで効果を上げることにつながっている。

(ケース④)

#### (4) 小中で連携した指導の実施

同一集団を経年で調査することによって、その学年の児童生徒について小学校教職員と中学校教職員が学力の状況等を共有し、中学校区全体としての取組を強化することができた。

	注目した結果データ	指導改善例    ##################################	成果例
ケース①	「主体的・対話的で深い学びの実施」について数値が低い ⇒質問紙の肯定的回答 3.7 (5段階評価の平均値) 友達は自分のことを認めてくれる ⇒質問紙の肯定的回答の割合 79.2%	・主体的に学べるよう児童 生徒自身の「問い」の設定 ・対話しやすい学級経営の 工夫	「主体的・対話的で深い学び」の伸びの実現 ⇒質問紙の肯定的回答 4.1 (5段階評価の平均値)  友達は自分のことを認めてくれる ⇒質問紙の肯定的回答の割合 89.3%
ケース②	「学力が高くても伸びてな い子」 B さん学力レベルの伸び ⇒ (国) ±0 (数) ±0	・人間関係の改善・長期的な 目標を立て進める学習法 の指導	<ul><li>昨年度学力を伸ばせなかった子の学力向上</li><li>B さん学力レベルの伸び⇒(国)+I(数)+2</li></ul>

ケ ー ス ③	学力層毎の伸び 「中間層が伸びていない」 ⇒ A さん学力レベルの伸び (国語) ±0(数学) + I	・学級集団の人間関係の把握 ・生徒間の協働による学び の充実	中間層の学力の向上 ⇒A さん学力レベルの伸び (国語) +3 (数学) +3
ケース④	学年の国語の力をもう少し 伸ばしたい 国語で学力を伸ばした子の 割合 53.1%	・センテンスカード等を使った文章構成の指導 ・誰でも参加できる発問の 工夫(学習意欲の創出) ・自分の力を伸ばす努力調 整方法の指導(やる気を引き出す声かけ)	国語の学力向上 国語で学力を伸ばした子の 割合 79.2%

#### 7 モデル実施の課題

#### (1) 全国学力・学習状況調査との重なりによる負担

小学6年生及び中学3年生は、全国学力・学習状況調査の実施から約1か月後に本調査の実施となる。特に中学3年生は、短期間に2度の調査を行うことにより年度初めの授業実施に支障があった。

#### (2) 中学3年生の調査結果の活用について

結果の返却・結果を活用する研修会が9月、実際に授業や指導に生かすのは10 月以降となることから、調査結果を生かす期間が中学3年生は極端に短い。

#### (3) 教員の負担

マニュアルの共有、調査資材の受け取り・確認、調査の準備・配付、回答や問題用紙の回収等、調査実施の事前事後に教員の負担が大きい。

#### (4) 提供される帳票の読み取りや分析

学校へ直接送付される帳票の量が膨大で、必要部分の抽出が難しく、各校各学年で結果を活用するには、提供されたデータをさらに加工する必要があった。

#### 8 令和6年度以降の実施について

モデル実施において、児童生徒への指導等に高い効果が認められたことから、課題を改善しながら全校で展開することとする。

#### (1) 実施方法

- ・全小中学校で、2教科(国語、算数・数学)と質問紙の実施
- ・小学4年生から中学2年生までを対象として調査実施
- ・CBT (コンピューターベースでのテスト) による実施

#### (2) 実施・活用支援

- ・調査分析活用シート・個別支援シートの提供による各校での確実な活用
- ・調査分析活用シートに基づく36校への活用研修の実施